

知恵の樹

growing in OZUKA

広島市立大学
附属図書館報

第50号 2011年7月

タイトルの由来について

「知恵の樹」とは、“思想の発展”を象徴するものとして、また、この樹を植えることは知力の督励を意味するものとして古今東西を問わず知られている。この樹を図書館報のタイトルイメージとし、大学が立地するここ大塚の山において樹齢を重ねていきたいとの思いを込めている。

なお、この「知恵の樹」のモデルは、本大学正面入口にある1対の「楷(かい)の木」である。

『知恵の樹』第50号を記念して	1
展示のお知らせ	1
特集 戦争や平和について考える	2~3
いちだいのトライアスロン出張講座 イベント報告&企画	4
図書館のウラガワ 第1回 新刊図書が並びまで	5
わたしの一冊	6
LOOK HERE!	6

『知恵の樹』第50号を記念して

附属図書館長 赤星 晋作

附属図書館報『知恵の樹』が今回で第50号になります。創刊号は1999年2月22日に発行されており、当時の図書館長は三原捷宏先生でした。『知恵の樹』の名称は、「思想の発展」「知力の督励」の意味を込めて命名されています。

それから12年が経ちました。当時の資料によると、図書19万冊、雑誌772誌、視聴覚資料528タイトルとあります。それが現在では、図書約30万冊、雑誌382誌(電子ジャーナル、データベース含まず)、視聴覚資料1,250タイトルに達し、かなりの充実がうかがえます。

そして、図書館をめぐる状況も変わってきました。端的には、多くの学術情報が印刷媒体から電子媒体に切り替わってきたことです。「誰もいない図書館」「誰も来ない図書館」といったことが世界的に言われ、図書館の存在意義が改めて問われました。

そうした中で図書館を、学ぶために皆が集う共通の場所:ラーニング・コモンズ(Learning Commons)とする新しい概念が登場してきました。図書館に、①従来の個人ベースの知識獲得だけではなく、グループ学習や相互交流への対応 ②ネットワークからの情報(電子媒体)と本(印刷媒体)からの情報提供 ③より細やかなレファレンス・サービス が求められるようになったのです。つまり、個人及びグループ学習、PCや図書を利用しながらの資料探し、プレゼンテーション準備やレポート作成等がワン・ストップで可能である場としての図書館です。

大学の使命を、J.パーキンスが言うように知識の獲得としての「研究」、知識の伝達としての「教育」、知識の応用としての「公共サービス」とするならば、大学附属図書館はそのベーシックな部分を担う極めて重要な機関です。

時代とともに、一年一年の年輪を重ね附属図書館も成長していかなければなりません。

展示のお知らせ

広島市立大学附属図書館報『知恵の樹』が、第50号を迎えました!

50号を記念して、これまでご紹介いただいた「わたしの一冊」を展示します。(期間:7月中旬~9月末)貸出もできますので、是非手に取ってみてください!

「わたしの一冊」で
“50”を作ってみました。
いかがでしょうか?



今年もまた、暑い夏がやってきました。広島・長崎の原爆の日、終戦記念日……。戦争や平和について考える機会の多い季節です。

この夏、平和の大切さについて改めて考えてみませんか。

『無国籍』 陳天璽著 新潮社 2005年【329.91 ㍻】

“ある日、私は国境のはざまに立たされ、どの国にも入れない経験をした。二十一歳の春のことだった。「無国籍」である自分を、この時ほど身にしみて感じたことはなかった。祖国だと思い続けていた 中華民国・台湾に入れず、一方、自分が生まれ育った日本にも入国できない。自分っていったい何人なのだろう、と思った。”冒頭より。

横浜中華街の華僑である著者一家が無国籍を選択した背景には、日中戦争、国共内戦、日中国交正常化（＝日本と台湾の国交断絶）という歴史が深く関わっていました。日本の永住許可と台湾のパスポートを持っていて無国籍、という複雑な環境を生きてきた著者に圧倒されるとともに、大学院でのテーマ選びをどう形にしていくなか悩み、恋人とのすれ違いに悩む姿には、現代の女性なら誰でもどこか共感を覚える部分があるのではないかと思っています。

著者は現在は国立民族学博物館の研究者として、無国籍者の研究を続けられています。興味があれば、その研究成果の一端である『忘れられた人々：日本の無国籍者』（図書館 3F 329.91 ㍻）もご一読ください。



『荒れ野の40年—ヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦40周年記念演説 新版』

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー 述 岩波書店
2009年【319.8㍻㍻】

1989年にベルリンの壁が崩壊するまで、ドイツは東西に分断されていました。ヴァイツゼッカー氏は、統一ドイツの初代大統領で、演説した当時は西ドイツの大統領でした。演説は、ドイツ敗戦の40周年にあたる1985年5月8日に、ドイツ連邦議会で行われました。

「ドイツ史の誤った流れ」を徹底的に反省していて、潔いです。読んでいて清々しく、非常に感動的です。ドイツから遠く離れた日本で、演説から四半世紀たった今でも、私たちの心にストレートに響く言葉が綴られています。演説中のヴァイツゼッカー氏の写真も、カッコイイです。

この演説の最後の部分は有名で、あまりに感動的です。みなさんにも紹介します。

「若い人たちにお願したい。他の人びとに対する敵意や憎悪に駆り立てられることのないようにしていただきたい。（…中略…）若い人たちは、たがいに敵対するのではなく、たがいに手を取り合って生きていくことを学んでいただきたい。民主的に選ばれたわれわれ政治家にもこのことを肝に銘じさせてくれる諸君であってほしい。…」

図書館 3 階展示コーナーといちだい知のトリアスロンコーナーで、「ヒロシマ・平和」に関する資料の展示を行います。（期間：7月下旬～8月未まで）

そちらもあわせてご覧ください。

『戦禍のアフガニスタンを犬と歩く』 ローリー・スチュワート著 白水社 2010年【292.62 ㍻】

アフガニスタンといえばタリバン。タリバンがバーミヤンの石仏を爆破したのは2001年3月。同じ年の9月にアメリカ同時多発テロ、11月にはタリバン政権が崩壊しています。

はじめに「彼ら（タリバン政権）が去ってわずか六週間後にアフガニスタンに降り立ち「ヘラート—カブール間を歩き」と書かれていたので、なぜその時期に、何の目的で、なぜ徒歩で、そんな危ない地域を、と思い読み始めました。

著者ローリー・スチュワートは当時イギリスの外交官で29歳。

この本では、彼が歩く先で出会う人々の言動、暮らしや地域の様子、気候や風土が丹念に語られています。著者が現地の多様な言語を使いこなし、この地の歴史にも詳しいことに驚かされますが、だからこそ描けるアフガニスタンの本当の姿がそこにあります。

これほどまでに異なったルールで暮らす人々がいるということをも「知る」ための1冊になると思います。



【映画】『ライフ・イズ・ビューティフル』

ロベルト・ベニーニ監督 1997年【V778.23㍻㍻】

第二次世界大戦前夜のイタリア。陽気なユダヤ系イタリア人 Guido は、本屋を開くという夢を持って町に向かう途中、美しい女性 Dora と出会い恋をします。持ち前のユーモアと機転で Dora を振り向かせ、ジョズエというかわいい息子にも恵まれて、あたたかい家庭を築きますが、日に日に戦時色が濃くなり、Guido 一家は強制収容所へ…。

強制収容所での労働は過酷で、たくさんの生命が理不尽に奪われていきます。そんな日々の中でも、彼らしいやり方で家族を守ろうと奮闘する Guido。

やりきれない戦争を描いていながら、この映画があたたかな気持ちを残してくれるのは、彼の強さ、家族への愛情の深さゆえではないでしょうか。

しかしそれでも、これが平和な時代だったら…と想像せずにはいられません。



『世界がもし100人の村だったら』

池田香代子再話 マガジンハウス 2001年【304 ㍻】

みなさんも一度は聞いたり読んだりしたことがある本だと思います。世界がもし100人の村だったら…自分はどうな立場の人間なのか想像できますか？

この本を読みると、世界には様々な状況に置かれている人たちがいるということ、自分は平和に暮らしていることなどが端的に分かります。私も改めて気付かされました。みなさんもこの本を読めば、悩み事があってもつらいことがあっても、自分は何て小さなことで悩んでいるんだろう、明るく前向きに生きて行こう！って思えますよ。

ぜひ一度この本を読んでみて、自分を見つめ直してみてください。きっと何か得るものがあると思います。

『それでも日本人は「戦争」を選んだ』

加藤陽子著 朝日出版社 2009年【210.6 卅】

東京大学で1930年代の外交と軍事を研究している著者が、歴史に関心の深い中・高生を対象に行った講義録です。

タイトルは過激ですが、教科書にありがちな平べったい事実の羅列ではなく、1930年代から続いた一連の戦争（日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦・満州事変と日中戦争・第二次世界大戦）に関する史実が意味するところの解釈を教えてください。

文体が語り口調なので、実際に講義を聴いているように読み進めることができます。著者からの問いかけに答える受講生の知識・考えがしっかりしていることにも驚かされますが、方向の異なる回答にも著者はそれを拾いながら、ますます話をふくらませていきます。

戦争について学ぶと同時に、歴史とはどういう学問なのかを知る一冊とも言えそうです。

同じ著者の『戦争の日本近現代史』（図書館3F 210.6 卅）もあわせてお勧めします。



『永遠の0(ゼロ)』

百田尚樹著 講談社 2009年【913.6 匕】

第2次大戦中特攻で死んだとだけ聞かされていた祖父のことを母のために調べることにした孫の姉弟。軍国主義の時代に、臆病者だと笑われようと、「生きて妻と娘のもとへ帰りたい。」と願っていた祖父は、「死んで悲しむ人がいてくれる。それだけで生きる努力をする価値がある。」と、生き残ることを第一にしていました。

その彼がなぜ特攻で死ぬことにいったのか…。

戦友が話す軍隊での祖父の姿に、道を見失っている状態だった弟も変わっていきます。

戦いの場面が映画のように綴られ、戦っている一人一人の家族へのさまざまな思いが迫ってきて、敵も味方も個人としての思いは同じだったのにと、涙を堪えきれません。

学生の年齢に戦争に貴重な時を奪われた人たちの無念さ、未来への思い平和へのあこがれが伝わってきます。人の命の重さに改めて気づかされます。

それと同時に、自由に考え生きることのできる今の有難さを思い、もっとやれるよ！と背中を押してもらえた気分にもなる本です。

今何か迷ってる人、できない理由ばかり口にしてしまっている人、ぜひ、読んでみてください。



『ボクの満州：漫画家たちの敗戦体験』

赤塚不二夫 [ほか]著 亜紀書房 1995年【916 ㍑】

現在も第一線で活躍している人の中には、満洲から引き揚げたという人が多くいますが、大御所と言われる漫画家には特に多い気がします。

1932年から1945年の短い期間、中国の東北地方にあらわれた“満洲国”。多民族共生を掲げた“王道楽土の理想郷”へと多くの日本人が移り住みました。そんな中、子ども時代に満洲に住み、戦後日本へ引き揚げた大御所漫画家たち（うち一人はすでに成人）が、子どもの頃の記憶と、その後知ったことをあわせて、それぞれが絵入りでわかりやすく伝えています。

巻末の執筆者たちの座談会の、赤塚不二夫さんの「オレたちの体験、いまの若いやつが読んでわかるかな。」という言葉が印象的でした。全てはわからないかもしれないけど、伝えたいという思いに耳を傾ける姿勢は持っていたいものです。

【映画】『サウンド・オブ・ミュージック』

ロバート・ワイズ監督 1965年【V778.25 ㍑】

修道院から家庭教師としてやってきたマリアと、トラップ一家が祖国を脱出するまでを綴った、実話がモデルのミュージカル映画の名作です。

舞台は1938年、第二次世界大戦直前のオーストリア・ザルツブルグ。修道女見習いのマリアは、退役軍人のトラップ大佐邸へ家庭教師として派遣されます。母親と死別し、父親から軍隊流に厳しく躾けられていたトラップ家の7人の子供達は、最初は心を閉ざし反発していましたが、マリアの明るい性格と歌であっと言う間に打ち解けていきました。厳格なトラップ大佐もマリアの人柄に触れるうち次第に惹かれてゆき、やがて二人は結婚。しかし、幸せも束の間、オーストリアがナチスドイツに併合され一変します。一家はアルプスを越えスイスへ亡命することを決意するのですが…。

「ドレミの歌」「エーデルワイス」など有名な曲が使われており、物語は知らなくても音楽の授業などで歌ったことがあると思います。改めて映画を観てみると、また新たな発見があるかもしれません。

（原作の図書もあります。【936 ㍑ 1,2】）



『日本のいちばん長い日 決定版』

半藤一利著 文藝春秋 2006年【210.75 ㍑】

昭和史については中学高校の歴史の授業ではいつも端折られがちで、詳しく教わったという人はそう多くはないのではないのでしょうか。しかし、私たちが生きている「現在」につながる「昭和」を知ることは、大切なことだと思います。

この本は、昭和天皇と閣僚が御前会議における「聖断」により降伏を決定した1945年8月14日正午から、ラジオの玉音放送を通じてポツダム宣言の受諾を知らせる8月15日正午までの日本のターニングポイントとなった「日本のいちばん長い日」を、1時間ずつ区切って描いたノンフィクションです。

昭和天皇、閣僚、軍人、宮内省職員、玉音放送に携わった放送局員…。様々な立場の人々が、何を考え、何をし、何をしなかったのか。その詳細が陸軍の戦争継続派によるクーデター、いわゆる「宮城事件」を中心に、関係者の証言や資料を基に克明に描かれています。

「昭和」を知るために是非一度読んでみて欲しい一冊です。



『希望のヒロシマー市長はうったえー』

平岡敬著 岩波書店 1996年【319.8 匕】

これは核兵器の違法性と平和への願いを訴え続けた著者が、広島市長として被爆五十周年の一年間に行った講演や国際司法裁判所での陳述などの体験を中心にまとめた報告書です。

広島市長という特異な立場で内外の政治家、市民、被爆者、学者、マスコミに接するとき、著者は自己の主張が正しく理解されないという現実と直面します。そうした体験の中で何を感じ、どう考えたのか、新聞記者時代に経験したことも交えてわかりやすく語られています。

平和は守るべきもの、戦争は起こしてはならないものと理解していても、戦争へ向かう大きな流れは一市民の力で変えられるものではないし、考えてもどうしようもない、と思う人も少なくないでしょう。そんな人に、どう生きればいいのかという一つのヒントを与えてくれる本として、この本をお勧めします。

いちだい知のトライアスロン イベント報告

出張講座 @ ひろしま美術館 -「木彫の巨匠 平櫛田中展」-

5月28日(土)、ひろしま美術館で「木彫の巨匠 平櫛田中展」に関連して出張講座を開催しました。雨の中、約80名の皆さんにご参加いただきました。たくさんのご参加、ありがとうございました。

まず、本学芸術学部の秋山隆先生に「木彫論」と題して約1時間講演していただき、続いて作品の前でひろしま美術館の学芸員水木祥子さんに解説(ギャラリートーク)をしてもらいました。

秋山先生の平櫛田中の作品と変遷に関する解説は具体的で、同じ木彫の表現者である先生が心を動かされる田中作品の魅力というものがしっかり伝わってきました。

また、「面をどうとるか」とか、「木取り」といった木彫ならではの手法、見どころを聞き、目からウロコが落ちる感じでした。これからちょっと上級の彫刻作品鑑賞者になれそうです。

ギャラリートークでは、水木さんがよどみなく、田中の作品の変遷と師との出会い、作品の背景、見どころを解説してくださり、いつもより深く鑑賞することができました。岡倉天心のことは心にしみました。

お二人のお話を伺ってあらためて作品をみると、作品の中に、いつも最高のものを求め、自分に厳しく作品に向かった田中の真摯な姿が見えてくるように思われました。

★参加者の声

- ・木彫を実際に製作される方ならではの話を聞かせてもらい、今までとは違う視点で観賞できるようになったと思います。
- ・秋山先生の木彫との初めての出会いのシーンを伺った時には、先生の感動の様がひしひしと伝わってきました。出張講座に参加すると作家と講師の先生、両方の方との距離が縮まる気がします。



出張講座 @ 広島市映像文化ライブラリー -「その夜は忘れない」-

7月8日(金)、広島市映像文化ライブラリーとの連携事業として、映画に関する講演会と「その夜は忘れない」(吉村公三郎監督)の上映会を開催しました。平日の夕方という時間帯のイベントでしたが、約70名の皆さんにご参加いただきました。

まず、国際学部の柿木先生に「映画の記憶/映画のなかの記憶」という演題で解説していただき、続いて映画を鑑賞しました。

柿木先生の講演では、「その夜は忘れない」の監督、脚本家、作品の背景と関係する映画などの解説に加え、この映画が「どう生きるか」に光をあてる映画であること、様々な被爆者の姿にも注目すること、「忘れないこと、忘れられないこと」を心がけて見ること、といった鑑賞のポイントをアドバイスしていただきました。

実際にみると、主人公を始めとする被爆者の姿、登場人物の生き方にいろいろ考えさせられる、とても深い映画でした。ヒロシマについて考える機会の多い市大生の皆さんには、ぜひ観てもらいたいと思いました。

講演の様子は、トライアスロンHP(学内限定)で公開しています。また、先生が紹介された映画・図書も図書館にありますので、この機会に鑑賞してみてください。

★参加者の声

- ・最初は「恋愛映画？」という印象だったが、最後には社会性のある深い映画という印象に変わっていた。紹介してもらってよかった。
- ・平和大橋、新広島ホテル、平和公園、今と違う街の様子が描かれていて、面白かった。
- ・「原爆一号」の吉川清さんの貴重な映像に感動した。



映画 「その夜は忘れない」 吉村公三郎監督 【DVD 館内利用】
「ヒロシマ・モナムール」 アラン・レネ監督 【DVD 貸出可】
「ひろしま」 関川秀雄監督 【DVD 貸出可】
図書 「京の路地裏」 吉村公三郎著 岩波書店 1992年 【382.16 30】



このほか、10月8日(土) 広島市現代美術館でオノ・ヨーコ展に関連した出張講座を企画中です！

最新情報はいちだい知のトライアスロンHP <http://triathlon.hiroshima-cu.ac.jp/> でご確認ください。

図書館カウンターの向かいにある新着図書コーナーをご存じでしょうか。
今回は新刊の図書がここに並ぶまでの長い“みちのり”についてお話しします。

1. 本を選ぶ

月刊の新刊図書情報誌（約 500 ページもあります！）を図書館スタッフ全員で回覧し、本を選びます。
また出版社からのダイレクトメールや新聞の書評欄等にもアンテナを広げ、適切な本を選びます。
先生方からも情報が寄せられます。

「〇〇についての本は必要かな？」
「□□というテーマでレポートを書いてみたい」…

2. 選書会議

1の段階で集められた情報をもとに購入候補図書のリストを作成し、1冊ごとに担当者が購入するに適切かどうか話し合います。

予算にも限りがありますから、その辺も考慮して…

3. 購入・納品

書店に注文します。約 4 週間後、本が届けられます。

4. 受入れ

本が届いたら、注文したものと同じかどうか確認します。確認が済んだら、バーコードラベルを貼ったり、図書館のスタンプを押す作業をします。

5. 登録

図書館のコンピュータシステムに登録します。これで、OPAC で検索できるようになります。
最後に本の配架場所を示す請求記号のラベルを貼ります。



本にバーコードを貼っています。

6. 配架

いよいよ新刊図書コーナーにデビューです！貸出もできますので、ぜひ利用してくださいね。



図書館では、学生のみなさんからの資料の購入リクエストも受付けています。ただし、学生や先生方の学習・研究・教育に必要な資料を収集することになっていきますので、お断りすることもあります。まずは、ご相談ください。

わたしの一冊

広島平和研究所 水本 和実 副所長

『内部被曝の脅威——原爆から劣化ウラン弾まで』

肥田舜太郎・鎌仲ひとみ著 筑摩書房 2005年

福島第一原子力発電所の事故発生以来、メディアに最も頻繁に登場する言葉の1つが、「内部被曝」でしょう。内部被曝とは、放射性物質を体内にとりこみ、長期間にわたって体の内側から放射線を浴びることです。

広島や長崎の被爆者の多くも、実はこの内部被曝を経験していましたが、被爆者の実態調査では、皮膚の上から放射線を浴びる、いわゆる「体外被曝」だけが注目され、内部被曝の危険性は長い間、無視され続けてきました。しかし1970年代ごろから、米国の一部の研究者により、核実験場の「死の灰」や原発事故が引き起こす内部被曝の危険性が、少しずつ指摘され始めました。

著者の一人、肥田舜太郎さんは、広島出身の元軍医で被爆者でもあり、医師として被爆者治療にも当たってききましたが、1977年に初めて内部被曝に関する研究を知って衝撃を受け、「体内からの被ばくという構図に全く無知だった自分に厳しい反省を強いられた」と記しています。

この本は、肥田さんが、核問題に詳しい映像ノンフィクション作家の鎌仲ひとみさんと一緒に、内部被曝の危険性を、分かりやすく、かつ鋭くえぐり出した、警告の書です。

この本は図書館トライアスロンコーナーにあります。ご利用ください。 <請求記号 493.19ビ>

LOOK HERE!

● 臨時休館のお知らせ

8月15日(月)は省エネルギーのための全学休業に伴い臨時休館することになりました。ご迷惑をおかけしますが、ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

● 開館時間の変更について

定期試験前後、夏休み中は開館時間が変わります。詳しくは、ホームページの図書館カレンダーでご確認ください。

区分	変更となる期間	開館時間
延長開館期間	7月13日(水)～8月4日(木)	8:45～20:00
夏季休業期間	8月8日(月)～9月30日(金)	8:45～17:00

● 夏季休業期間中の特別貸出について

夏季休業に伴い、7月25日(月)から、図書の貸出期間を延長します(雑誌は除く)。

区分	特別貸出期間	返却期限
学部生	7月25日(月)～9月26日(月)	10月11日(火)
大学院生	7月25日(月)～9月7日(水)	10月11日(火)

いちだい 市大コーナー新着図書

『犬島ノート = Inujima note』柳幸典著
『展覧会をつくる』研究代表者吉井彰
『広島に聞く広島を聞く』浅井基文編著

“楷の木”プレゼント



小さな“楷の木”を差し上げます。先着順ですので、ご希望の方はカウンターまでお尋ねください。

編集後記

1999年2月22日に芽を出した「知恵の樹」も50号を迎えました。利用者の皆さんへの情報伝達の場として大きく育つことができているのでしょうか？

50号を記念して紙面をリニューアルしました。新しくスタートした「図書館のウラガワ」では、皆さんからの「こんなことが知りたい」という疑問にお答えしたいと思います。「声の箱」やE-mailなどでご意見、ご要望をお待ちしています。

2011年7月15日発行
広島市立大学附属図書館
広島市安佐南区大塚東三丁目4番1号
TEL : (082) 830-1508
FAX : (082) 830-1659
E-mail tosho@lib.hiroshima-cu.ac.jp
http://www2.lib.hiroshima-cu.ac.jp